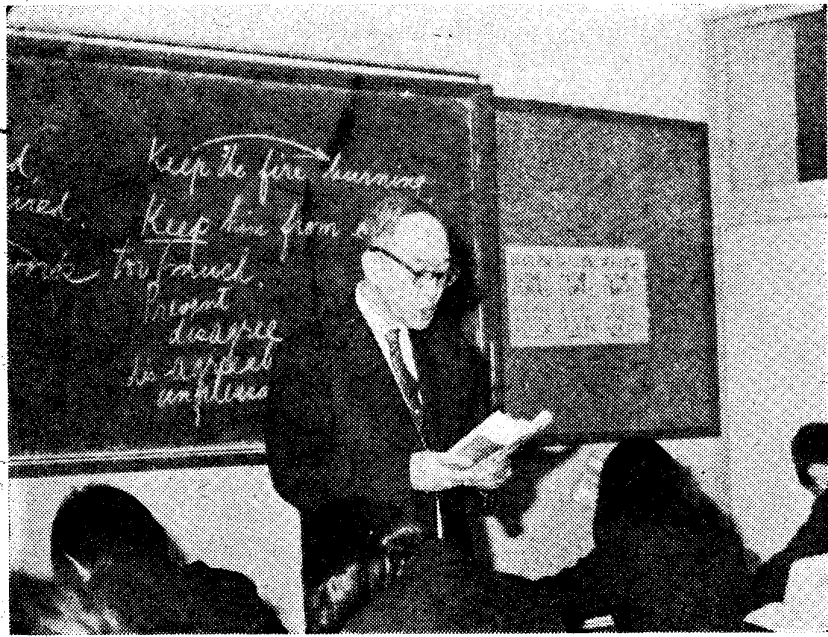




授業中の澤先生（新宿高校で）

英語を英語で教える

昭和46年4月22日、午前10時25分、新宿高校の第3時限の始業のチャイムが鳴り響いた。と、ほとんど同時に澤正雄先生は2年F組のドアを開けていた。生徒たちも心得たものである。休み時間の活気に満ちたざわめきを教室の隅にひっそりと隠して、机の上にはすでにリーダーのテキストがのっている。

「Good morning, boys and girls!」
「Good morning, Mr. Sawada.」

さあ大変だ。40数名の生徒たちの顔に緊張感みなぎる。なにしろ挨拶から始まる授業はほとんど英語で進められるのだ。日本語で開けるのは最後の10分ほど。和訳や文法的説明の時だけなのだから。

恒例の、復習の豆テストを約5分ほどで終わると、今日のレッスンの説明が始まる。もちろん英語である。しかもリーダーにのっている英文をいかえてある。生徒の耳がひとつになって澤先生の大きなよく響く声に集中する。流ちょうな King's English の流れに吸いこまれていく。あらためて説明が終わると、澤先生は一人一人生徒を指名して、レッスンの大意を聞いたり、テキストにのっている例文を先生がどういいかえたかなどを聞く。指されるのはまず全員と考えていい。だから、たとえ眠くても、この時間ばかりはパッチリ目があきし、隣のクラスのかわい子ちゃんのことなど考えてはいられないのだ。

「気をつけて聞いてないと、あてられて立ちましたものの、何も答えられず赤恥かくのがせきの山なんですから」誰しもそんな目にはあいたくないモンネ。

ここは東京の副都心。若者の街として名高

澤 正雄氏の横顔

現在、全英連（全国の中学高校の英語教師の研究会）の副会長。著書に「新制英作文問題集」「英語学習の基礎」「基礎英語」「英文解釈の盲点」などがある。59歳。

い新宿の、環境は決していいとはいえない盛り場のハズレに学校はある。新宿駅南口より歩いて5分だ。

かつての東京府立6中。学校群になる前は、日比谷（府立1中）、西（府立10中）、戸山（府立4中）などと共に東大はじめ有名国立大学への予備門として、多くの秀才を集めた都立のナンバー・スクールである。

澤先生は、この新宿高校で教師生活を送ること21年。名実ともに新宿高校のめづる存在の人である。いわゆる、古だぬきだが、澤先生の風貌は、たぬきとはほど遠く、「青空と対話とシビルミニマム」の美濃部さんそっくり。やさしいおじいさんといったところか。しかし速断は禁物、なかなかどうして厳しい先生なのだ。

昭和の初期から教壇に立ち、戦時中、敵性語であった英語を教え、今日で約40年にもなるのだから、授業態度の厳しさは当然のことかもしれない。

昭和8年、高師を卒業

明治45年3月16日、茨城県の水戸で生まれた。父親は当時、茨城県立女子師範学校で修身を教え、母親もまた教師であった。

「父母が早く亡くなりまして、私は祖母と共に父母の郷里である大分に帰ったんです」大分の杵築（きつき）中学を卒業すると高

人物クローズアップ

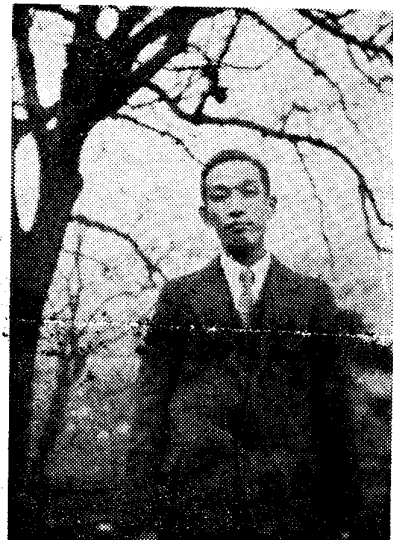
昭和史を生きた教師の40年

高校英語教育界の第一人者

澤 正雄先生

等師範（現在の東京教育大学）入学のため上京。昭和4年の春であった。25倍以上の競争率を突破して入学した30人の一人が澤さんだった。

「その頃は高等師範には特典がいくつかあったので、人気があって入るのも難しかったのです。兵役も免除されていましたし、高師を出て教師になると初任給が90円、大学卒が60円の時代でしたから、高師は魅力だったのですよ」



昭和10年、熊本時代の澤先生

それに澤さんは「教師以外の仕事は考えられなかった」子供の頃からはっきりと決めていたのだという。

「祖父は鹿嶋置泉の頃、オランダ語を学び、大分の師範学校で英語を教えたほどの進取の気性に富んだ人。両親も教師という家庭に育ったのですから、教師になるのは自然の成りゆきだったんですね」

英語を専攻したのも、別段理由があったのではない。

「祖母がクリスチャンでしたから、子供の

頃から日曜学校に通い、英語には親しんでいたし、中学1年の担任の英語の先生と、隣の家の中学の先輩で東京の高師で英語を勉強していた人に影響を受けたためでしょうか」

当時の同級生には共立女子大の早川浩教授、教育大の入江勇起男教授、大妻女子大の須沼吉太郎教授らがいる。

昭和8年、高等師範を卒業、文理大（現在の教育大は高等師範と文理大の合体したもの）に入ったが、入学早々、身体をこわして退学。

「休学してゆっくり療養できる身分ではなかったものですからね。元来、丈夫なほうではなかったもので、勉強とアルバイトの両方をとても続けられないと思い、郷里に戻ったのです」

高師を卒業する前年、共に上京した祖母は死んでいた。天涯孤独となった澤さんは、大分の叔母さんの家で療養生活を送ったあと、教員生活に入ったのだった。

初任給は85円

昭和9年春、熊本の片田舎にある県立宇土中学にさっそうと赴任してきた若い先生がいた。

「1年の第1日目から英語でベラベラベラとやられて、僕はア然とした。驚きが去ると、みんなして、これが King's English なんだと感嘆し、早くあんなふうにしやべりたいとあこがれたものです」というのは教え子の徳永孝一さん。現在は東京都下の三鷹市で医院を開業している。

当時の授業数は今の中学より多く、週約8時限だった。澤さんの1週の受持時間は20時間ぐらいだったという。科目はリーダー、サイドリーダー、作文、文法で、当時のテキストを見ると、いまよりも高度なものである。

「昔の中学は義務教育ではありませんから、生徒たちはいわゆるエリートで、熱心に

（11ページへ）

語学研修旅行とHOME STAYのパイオニアが贈る新企画！

■ A コース

高校生・大学生のための旅行

* SOUTHAMPTON TECHNICAL COLLEGEにて二週間の研修。
（正しい英会話修得が出来ます）

* ヨーロッパ旅行に北欧とスペインを同時に組み入れた新しい旅行です！

東京→ベルゲン→ロンドン→マドリッド→ローマ→ベニス→チューリッヒ→パリ→アムステルダム→東京

7月26日出発 8月25日帰国（31日間）

¥475,000

勝手ながら先着30名様に締切らせていただきます



■ B コース

中・高等学校英語教師のための旅行

* SOUTH DORSET TECHNICAL COLLEGE (WEYMOUTH) にて特別教授陣による二週間の研修。
（新しい英語教育法についてなど盛り沢山のプログラム）

* お忙しい先生方のために三週間という短期間にバックしてみました。

東京→アテネ→ローマ→パリ→ロンドン→アムステルダム→東京

8月10日出発 8月30日帰国（21日間）

¥398,000

勝手ながら先着25名様に締切らせていただきます

A・Bコース共、英国に於ける研修期間中は英国中流家庭に滞在し、側面からも語学力養成のお役に立ちます！

(10ページより)

勉強しました」と澤さん。

「3年の中頃には、4年のリーダーをやっていた」(徳永さん)というから、生徒だけでなく先生も熱心だったようだ。

初任給が85円。「当時、8畳まかない付きの下宿が20円。洋服1着いいのを作っても30円〜35円。暮らしては楽でした」

授業のかたわらESSの指導もし、アメリカ人の宣教師をよび週1回、会話のクラスをひらくなどしていたが、この会話のクラスのことでも思わぬ事件がもたらがった。

昭和11年頃は宣教師ではあっても、アメリカ人をよんで会話のクラスは大っぴらにはできず、ひっそりとやっていたのだが、ある日、そのアメリカ人宣教師がなんだろうと、のぞきこんだのが銃器庫で、それを配属将校にみつかったのだった。宣教師はスパイの嫌疑をうけ、澤さんも憲兵隊によばれた。

「あの時、学校をやめる覚悟はしていたのですよ。が、校長の骨折りで無事、事件は片づきました」

昭和13年から2年間は、先生の母校である大分の杵築中学で教鞭をとった。

英語は敵性語

15年に大連に渡る。

「もう妻子をかかえていたのですが、バグボンドのようなところがありましてね。広々したところで暮らしてみたいと……」

国立の大連第1中学はリベラルな校風をもち「のびのびした、雰囲気の良い学校」だったそうだ。

が、リベラルな校風も時勢には勝てない。16年12月には日本は太平洋戦争に突入、生徒たちは勤労動員でかり出され、次第に授業数も減り、英語は敵性語として、にらまれ始めた。

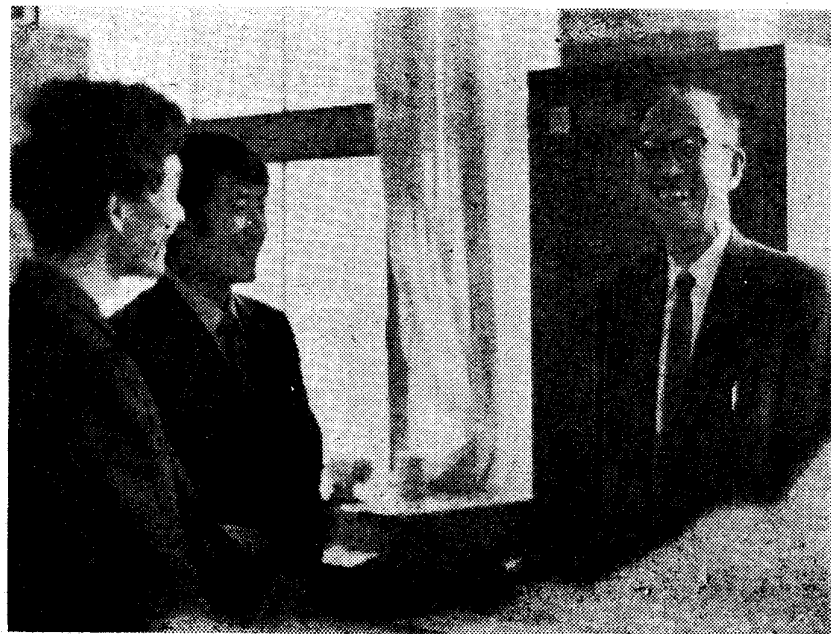
「教科書の内容などもずいぶん変わって、ワシントンの桜を折った話などは消され、かわって天体だの、生物だのというニュートラルな話題が多くなりましたよ。また、非国民とはいわれませんでした。英語の教師を非国民的に扱う人もいましたし。けれど、大陸

だったせいか、あの中学の校風か、さほど肩身のせまい思いはありませんでした。それにあの頃、生徒たちは陸軍士官学校や海軍兵学校にあこがれて勉強していたのですが、陸士は入試から英語をはずしたけれど、海兵はありましたからね、だから英語を勉強したい者も多かったし、必要でした」

大連時代の教え子に山岸敏永さん(興銀、外国部勤務)がいる。

「澤先生は厳しいし、できればどなりもしたけれど、敵国語などということは度外視して、実に熱心に教えてくれました。教練のため英語の授業ができないと、いつでも補習してやるぞといわれ、よく何人かで先生のお宅にまで伺って勉強したものです」と山岸さんはいう。

昭和20年、戦局はいよいよ厳しくなって、5月には澤さんも応召、ソ満国境で8月、終戦を迎えた。それから2年間、ソ連軍に抑留され、飛行場整備の労役に服していた。



「早いなあ、君たちが教育実習生でくるとは…」(職員室で卒業生と)

ボクはアメリカの高校生

(25) 杉山竜司

Brotherhood Day

Waterford 地区には三つから四つの高校がある。その中の一つ Waterford-Mott high school で、3月3日、Brotherhood Day という行事が、私たち外国交換学生のために催された。

この Brotherhood Day というのは、年に一度、Mott high school にある foreign



僕のクラス

exchange club の主催によるもので、Waterford 地区の高校、あるいは中学に通っている交換学生を、1日だけこの学校に招待するものである。このクラブの先生の話によると、この行事は、いままでは成功に終わっていて、Mott high school の生徒にとっても、各国の交換学生にとっても、友達をつくらする上にとっても良い行事だそう。

ところで、3月2日、私は学校を終えた

後、他の二人の交換学生と連れだって、Mott にでかけた。そこにはすでに、1日だけのホストファミリーになる家庭が私達を待っていて、すぐに、みんなそれぞれの家に引き取られた。

この時、私の泊まった家は、私の本当のホストファミリーと比較すると、非常に静かな家で、Mott に通っている高校2年の Dan と彼の両親の三人家族だ。もっとも、Dan の上に二人の兄弟がいるが、長男は海兵隊、次男は陸軍で、現在ベトナムにいるそうだ。

私と Dan は夕食をすませたあと、近くの家で開かれる Brotherhood Day のためのパーティに出かけた。パーティにはすでに、交換学生と Mott の学生とあわせて、40人以上の学生が来ていた。この時のパーティは、とてもにぎやかなパーティで、始めから終わりまで、レコードのかけっぱなし。私もダンスをしたり、いろいろと話をしたりして、8時から11時頃まで、とても楽しい時を過ごした。

あくる日、Dan と共に Mott に行った。この日は、Dan の出席しているクラスへ彼と共に出席することになっているので、1日中、彼の後にくっついていなければならなかった。

〔筆者は Youth For Understanding Teenage Exchange Program (YFU) の交換留学生として、昨年8月21日渡米、米国ミシガン州の Waterford-Kettering High School に留学中〕

「学生時代にロシア語をかじったことがあって、それが役に立ちました。特高にいらまれて、モノにならないうちにやめました」

民主主義にとまどう

九州の郷里に帰ってきたのはもう昭和も22年になってから。大連にいた奥さんと4人の子供は一足先に引き揚げていた。

「妻の顔を見て、最初にいった言葉は何だと思えます。『何日分の米がある?』だったんです。すると妻が『はい、親子6人、2週間は食べていけます』と答えた。私はそれだけ聞くと安心して眠ってしまいました。あの時の気持ちを忘れたいですね。人間、欲張ることはありませんよ」

再び杵築中学で教えることになったが、驚くことばかり。

「何年も内地を離れていたうえ、ソ連に抑留されていて戦後のことを何も知らない。生

語に関しては、何でも英語でなきゃという浮わつた空気も世間にはありましたが、なにはともあれ、speaking & hearing に重点がおかれ、本来あるべき姿になったのはよかった」

澤さんは新宿高校の歴史と共に歩んできた

「昔は誰もが戦争がおわって精神的にも飢えていた。だから本など手に入りにくかったけれど、知識欲がすごく、モーレツに勉強したものだ。オレたちが明日の日本をにのうのだという気概にあふれていたものです。が、今はね、衣食足りて礼節を知るといいますけどねえ、ハハハ」

今の生徒はちゃっかりしていて、「先生、そうイヤイヤいわず、テストに出そうところをうまく教えてちょうだいよ」なんていう。

「でも、昔はよかったなんていうんじゃない。これも時代の流れですからね」

が、澤先生の授業方針は昔から一貫している。「丸暗記などバカバカしいという生徒がいますが、語学ばかりは苦勞しなきゃ身につかないでしょう」

5年前の卒業生、滝川洋二さんと北原清志さんは口をそろえて「厳しい一言につきますよ」といった。「退屈するヒマなんてない授業で、おっかなかった。それと『豆テ』、よくまあ休むことなく続いたなあ」

『豆テ』とは生徒間で有名な澤先生の豆テストである。昭和9年から欠かさず授業の時に豆テストをやっている。インタビューに行ったら、ちょうどその採点中であつた。

「長年、子供とつきあってきましたが、もちろん子供には子供のいやらしさもある。が、なんといっても純粋で、かわいいですよ」という澤さん。自身も8人のお子さんがいて、孫もいる。日曜学校の校長でもあり、毎日曜日は欠かさず小石川白山教会へ出向く。

澤さんを知る人はみな「厳しいが涙もろいところがあって暖かい」という。戦争中、誰も訪れる人のなかった宣教師の家や、ちい病患者的の病院を足繁く訪れたり、日本にとどまっている外国人の友人たちの安全を祈っていたという澤さんである。

「厳しいと感じるのは、先生自身がご自分にきびしかったから、よけいそう感じたのです。だから尊敬できました」という山岸さんの言葉は、人間澤さんをよく物語っているだろう。

二つの目

最後に、澤先生の英語に対する考えを紹介して結びとしよう。

「生徒に根本的な質問をよく投げかけられます。なぜ英語を学ぶのだと。それに答えるのは教えている私の役目です。英語学習にはプラクティカルな目的もあります。が、根本は、ものの考え方を養うことだと思います。私たちに目が二つあるように、日本語とは異なるもうひとつの心の目をもつことは大事だと思うんです。的確にものを判断するには、別の見方というものも必要だから。そういう目を外国語を知れば、養えると思うのです」

(本頁・中島順子)

A good place to learn English is the United States.

The place to learn English in the United States is the Institute of Modern Languages, which is really two places. With one school in Washington, D.C., and another school in New York City. The Institute of Modern Languages will teach you the English essential to your studies or professional career. And we'll even help you find a place to live. Courses begin every four weeks.

For information write to the school in the city of your choice.

Information Office
Institute of Modern Languages
2125 "S" Street, N.W.
Washington, D.C. 20008, U.S.A.

Information Office
Institute of Modern Languages
61 West 51st Street
New York City 10019, U.S.A.

Institute of Modern Languages, Inc.
A subsidiary of American Express Company
Authorized under federal law to accept foreign students.